

退休寺第1遺跡発掘調査 現地説明会を開催！



▲現地説明会の様子（経塚の説明）

4月25日（日）に開催した退休寺第1遺跡の発掘調査成果についての現地説明会に、町内外から90余人の参加があり、盛会となりました。

今回の調査は、町道退休寺線改良工事に伴い、金龍山退休寺付近の約775㎡について、昨年11月中旬から今年4月末にかけて実施したもので、経塚、道路遺構、弥生時代後期の竪穴住居跡、中世の土坑などを検出しました。

退休寺関係の遺物 金龍山退休寺は、延文二年（1357）に因幡・伯耆地方最初の曹洞宗寺院として開かれ、その後

に山内に開かれた塔頭五院が伯耆地方を中心に末寺を増やして一大寺院に発展し、曹洞宗隆盛の礎を築きました。信仰拠点として旧八橋郡や汗入郡方面からの参詣道も通じ、江戸時代後期には多い日では一万人が訪れたといえます。

山内塔頭五院の一つ普門院跡西側の退休寺墓地隣接地では、瀬戸焼の天目茶碗、備前焼、伊万里焼や青磁、仏具の引磬（読経の際に手に持ち打ち鳴らす仏教の楽器）、北宋銭などが出土しました。引磬は伏せて埋納されており、13世紀代に遡る可能性がある古手のもので、天目茶碗は16世紀末頃の安土桃山時代のもので、2個を伏せ重ねて埋納

されていました。僧侶の生活や文化の一端がうかがえます。

退休寺参詣道 郡境にもなっていた退休寺汗入郡参詣道は、江戸時代後期頃に大きな改修があったことなどが確認できました。

参詣道より古い道路遺構もあり、以前から人々の往来がある場所だったようです。

経塚 経塚の発見は大きな成果で、この経塚は丘陵肩部に、斜面以外の周囲を溝状に掘り、方台形状に盛土して造られていました。出土した12世紀中頃の和鏡や外容器の中世須恵器甕から、平安時代末期の12世紀後半頃に造られたものと考えられます。



▲出土した仏具（引磬）



▲経塚出土の12世紀中頃の和鏡

当時の経塚の多くは、寺社境内やその付近の丘陵尾根上に造られており、寺社や僧侶が深く関わって造営されたことが知られています。調査では10〜12世紀頃の遺物も出土しており、この付近に天台宗寺院などがあった可能性が高いと考えられます。

金龍山退休寺が曹洞宗寺院として初めて進出する際に、この地を選んだ背景について、信仰的な素地があった当地を選んだ可能性を示す調査結果となりました。

（人権・社会教育課文化財室）

まちなたから(3) 文化財室通信

大山寺の請来仏

今回は大山寺に伝わる白鳳仏を紹介しました。大山寺霊宝閣には国の重要文化財に指定されている金銅仏がもう1体保管展示されています。

その金銅仏は、台座がなく足裏まで鑄造された像高約37cmの観世音菩薩立像で、損傷が少なく状態が良いものです。

雑で華やかな装身具、顔立ち、太造りな体部などの特徴から、10世紀後半から12世紀前半頃の中国大陸の北宋あるいは遼で制作された金銅仏と推定されています。

この仏像が請来仏として大山寺にもたらされた時期や背景は不明ですが、当時の大陸製の金銅仏は類例が少ないものであり、大山寺の貴重な宝物です。

（人権・社会教育課文化財室）

化仏坐像を正面に据えた大型の宝冠をかぶり、左手に水瓶、右手に宝珠を持つて、冠紐と垂髪を両肩に垂らした姿をしています。

花飾や玉繫文などの天衣、胸飾や瓔珞などの複

